

京都市京セラ美術館開館1周年記念展「森村泰昌：ワタシの迷宮劇場」
2022年3月12日（土）～6月5日（日）

現代美術におけるセルフポートレートの先駆者の一人が
秘蔵インスタント写真 800 枚以上を含む作品から 35 年超のキャリアを総括する大規模個展

京都市京セラ美術館の開館1周年記念展のひとつとして、日本を代表する現代美術家の一人、森村泰昌（1951年大阪生まれ）の個展を開催します。1970年代に京都市立芸術大学で学んだ森村は、美術史における名画の登場人物や歴史上の人物、女優に扮するセルフポートレートを制作することで、ジェンダーや人種を含んだ個人のアイデンティティの多重性を視覚化し、個人史と歴史の交錯点を表現してきました。近年では、ジャパン・ソサエティ（2018年）、プーシキン美術館（2017年）、国立国際美術館（2016年）、アンディ・ウォーホル美術館（2013年）、アーティゾン美術館（2021年10月～）での個展開催のほか、「横浜トリエンナーレ2014」でアーティストディレクターを務めるなど、国内外で活躍を続けています。

出品作品は、これまでほとんど発表されることのなかった、1984年から撮りためている秘蔵のインスタント写真約800枚に加え、1994年に森村が自作の小説を自ら朗読したCD《顔》の音源をもとに、展示室に特設の音響空間をしつらえ、無人朗読劇として再制作します。本展は、森村の京都における1998年以来的大規模な個展であり、35年余り継続されてきた私的世界の全貌を公開する初の試みとなります。

何者かに成り代わることで自己を解体し、一個人における複数の顔を露呈する森村の表現は、スマートフォンの進化やSNSの普及によって身近になった「自撮り」と共通しながらも、決定的に異なる面を持っています。そこには、自己への透徹した眼差しと、一人の人間が複数の存在として生きていくことへの圧倒的な肯定を見ることができます。コロナ禍において、あらためて自身の制作の原点に立ち返ることでこれからを模索する、森村の現在を提示する展覧会となるでしょう。



上記すべて「ワタシの迷宮劇場」シリーズより 1984-
© Yasumasa Morimura

主催：森村泰昌展実行委員会（京都市、毎日新聞社、京都新聞）

会期：2022年3月12日（土）～6月5日（日）

会場：京都市京セラ美術館 新館 東山キューブ

開館時間：10:00～18:00（最終入場は17:30）

休館日：月曜日（祝日の場合は開館）

料金：一般：2,000（1,800）円、大学・専門学校生：1,600

（1,400）円、高校生：1,200（1,000）円、

小中学生：800（600）円、未就学児無料

※（ ）内は前売・20名以上の団体料金。

※e-tixからの購入で各当日料金から100円引き。

※京都市内に在住・通学の小中学生は無料。

※障害者手帳等をご提示の方は本人及び介護者1名無料。

確認できるものをご持参ください。

前売券：美術館ウェブサイト販売中



「ワタシの迷宮劇場」シリーズより 1984-

展覧会の見どころ

1. 十人十色のワタシに変化する！ 現代美術とセルフイー

名画やファッション雑誌の登場人物、あるいは自由にカメラの前で何者かを演じ、さまざまな人格に変身して撮影された森村のポートレート作品。そこでは、ときに性別や国籍、年齢すらも曖昧となり、誰しものが持ちうる人間の流動的な多面性やさまざまな欲望が形になっています。セルフイーやSNSが生活の一部となった今、それは多様な生のあり方を認め合おうとする私たち現代人の姿をもあらわしているようです。

2. 秘蔵のインスタント写真を初公開

1984年から撮りためている秘蔵のインスタント写真を、約800枚というボリュームで展示します。森村にとってインスタント写真は、アトリエなどの私的空間で行われる儀式の痕跡のようなものです。これまで撮影されてきたこの私的世界を総覧することで、森村作品をなす35年にわたるバックグラウンドの全貌を浮かび上がらせませす。



「ワタシの迷宮劇場」シリーズより 1984-

3. 特設の音響空間で上演される 声の劇場《影の顔の声》

1994年に森村が自作の小説を自ら朗読して制作したCD《顔》。今回これを発展させる形で、架空の京都の寺院を舞台に展開される幻想的な世界を、展示室に特設の音響空間をしつらえ、無人朗読劇として再制作します。近年、精力的に舞台に取り組んでいる森村が、28年の時を経て、セルフポートレートとしての「声」の空間を立ち上げます。

無人朗読劇《影の顔の声》2022年、25分（仮）（ワタシの迷宮劇場／「声の劇場」セクションにて）
脚本・朗読：森村泰昌、演出：あごうさとし、技術監督：夏目雅也、舞台監督：小林勇陽、音楽：中川裕貴
サウンドデザイン：荒木優光、甲田徹、映像・展示制御プログラミング：小西小多郎、照明：吉本有輝子



《顔21》1994

4. 建築家西澤徹夫+森村泰昌のコラボレーションによる会場構成

青木淳とともに京都市京セラ美術館の大規模リニューアルプロジェクトを手がけた西澤は、現代美術展の会場構成も数多く手がけています。当館の建築空間を知り尽くした西澤と森村とのコラボレーションは、新館東山キューブを「迷宮劇場」へと変貌させます。



「会場構成イメージ案／記憶のトルネード」（森村泰昌 素描 2021）

森村泰昌から本展に寄せて 「ワタシ×迷宮×劇場＝？」

こうありたいと私思うワタシ。私ってこういうひとなんだと決めつけているワタシ。私自身ですら思いもよらなかった未知のワタシ。私のなかにはたくさんのワタシがいて、まるでそれは迷宮のように入り組み、あるいは様々なワタシが登場する舞台のようでもあって、とにかく一筋縄にはいきません。

世界を解釈するのも、歴史を紐解くのも結局はこのワタシなのだとしたら、まずはワタシというこの複雑怪奇なスタートラインに今一度立ち戻り、最初からやり直してみたい。

本展は、コロナの時代の閉塞した環境だからこそ見えてきた、なにが大切なのかという問いがテーマです。私にとって、そしてあなたにとって大切な宝物は何？ 展覧会を通して捜しあてられたらいいなと思っています。



森村泰昌：1951年、大阪市生まれ。1985年、ゴッホに扮したセルフポートレート写真でデビューして以降、国内外で作品を発表。2014年、ヨコハマトリエンナーレのアーティストティックディレクターを務める。近年の個展に、「森村泰昌：自画像の美術史——『私』と『わたし』が会おうとき」（国立国際美術館、2016年）、「森村泰昌：エゴオブスクラ東京2020——さまよえるニッポンの私」（原美術館、2020年）、「ほんきであそぶとせいかいはかわる」（富山県美術館、2020年）、「M式『海の幸』——森村泰昌 ワタシガタリの神話」（アーティゾン美術館、2021年）等。2018年、大阪・北加賀屋に「モリムラ@ミュージアム」を開館。著書に、『自画像のゆくえ』（光文社新書）ほか多数。

掲載画像はすべて © Yasumasa Morimura

※ 本展覧会は、新型コロナウイルス感染症対策を十分講じて開催します。
リリースに掲載の広報画像をご希望の方は <https://forms.gle/nFrzsrZpurd5sdKY9> からお申し込みください。

広報お問い合わせ：京都市京セラ美術館 広報 西谷・水野 TEL: 075-275-4271 E-mail: pr@kyoto-museum.jp